

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-10

はじめに

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

10

(発行年 / Year)

1986-03-15

はじめに

琉球方言は日本語の中にあって本土方言とは異なる特徴をもっている言語である。その特異性を生み出した要因として、島嶼という地理的条件をあげることができる。すなわち南海の島嶼には本土におこった時代ごとの言語の変動の影響がそのまま伝播していかなかったために、本土における歴史的な言語変化の波からはずれてしまった面をもっている。たとえば、本土では、はやくに失われたハ行P音や、室町末期に起った活用語の連体形と終止形の同化作用という大変動や、係り結び法の消失など、これらは、中央語における歴史的な言語変化の現象としてあげることができるが、この現象は、本土のあらゆる方言をまき込んでいった。ところが琉球方言では本土のように中央語の歴史的な言語変化の波をかぶらずに、これらの古形をいまだにとどめ、あわせて多くの古語もよく保存していて、その特異性をあらわしている。

古い相もさることながら、いま一つは、島嶼という条件によって、琉球方言の内部において新しい個別の言語変化が深化していったためにその特異性をさらに深めていっていることである。無気喉頭化音と有気非喉頭化音との対立、宮古方言のf、vの発生などがそれである。

このように古い相と新しい相をもつ琉球方言は、奄美、沖縄、宮古、八重山、与那国の諸方言の特徴を生み出し、これらはさらに小方言に分化し、島ごと、集落ごとの方言にまで細分されているのである。これらは、あたかも日本語の変化の可能な限りの方向性を示しているかのようでもある。このような小方言を生んだ琉球方言の諸変化は、本土方言では観察できない多くの言語現象の観察を可能にしてくれる。これらの現象を比較検討することによって、琉球方言の変化過程をあとづけることが可能であり、ひいては日本語の変化過程の全体像をえがくことも可能となるだろう。そのための現存する諸方言の資料を整えることが急がれる。

日本語の一分枝として存在している琉球方言は、いま、試練の時機に直面している。すなわち、交通機関の発達によって島嶼という条件は克服されつつあり、また、マスコミの発達によって琉球方言の特異性も失われつつある。これは、工業化・情報化社会における必然的な趨勢とはいえ、大いなる文化遺産の消失を意味するものであり、文化的に貴重な資料が失われることになる。

このような状況にあって、法政大学沖縄文化研究所では、琉球方言の実態をできるだけ広範囲にわたって収集し、少しでも多くの言語資料を後世に残していくことを責務の一つと考えるものである。

琉球方言の資料を収集するにあたって、次のような計画を立てた。

- (1) 奄美諸島から与那国にいたる南島全域の言語実態を、地理的にも、言語的にも、できるだけ広範囲にわたって記述する。
- (2) 調査は、年に一地点に限定し、その地点の言語現象をできるだけ多く記述し、年々その成果を積み重ねていき、ある時期にこれらを集大成する。
- (3) 調査では、臨地してその方言を簡略音声記号で表記収集し、できるだけ分析しない生の言語資料を得るようにする。

- (4) 調査は、外間守善・屋比久浩・中本正智・内間直仁・野原三義・加加工真市・多和田眞一郎・名嘉真三成の所員・研究員および任意による参加者が適宜担当する。多くの方の参加を歓迎する。
- (5) 一年ごとの調査結果をまとめる。

本誌は、今号で第10号となる。昭和50年に創刊号を出して以来、1年も欠かさずに発行してきたことになる。その間、所員・研究員の海外研修、あるいは勤務先の変動などにより、いくどか編集が危ぶまれる時期もあったが、そのつどどうにかのりきってきている。

以前は、調査地を設定して、調査員が各分野を担当し、夏休み・冬休みなどを利用して現地調査を行ない、その結果を報告するという形をとっていたが、上記諸状況の変化にともない、それも困難となった。現在は、各自が調査した資料をまとめて報告することになっている。今回は、そういう報告が五点よせられた。

また、本誌の普及にともない、所員・研究員以外の方々からの投稿もあり、それが本誌の内容充実に大きく役立っている。今回は、久野マリ子氏（国学院大学講師）からの投稿があった。

昭和 61 年 2 月

法政大学沖縄文化研究所